

ユース・ブレイク 入選レポートから



△レポート入選者の表彰

原野開拓の酪農モデルケースを

下益城郡松橋町 前崎 正隆 (農業 30歳)

日本人の食生活の慣習が、近年澱粉質食品から蛋白質食品へと変化してきたことは、先進諸国の食生活と考えあわせて誠によることばしいことである。

だが、日本の食糧生産の基盤は、この変化に対応できる状態ではなく国際支出中に占める農産物の割合は増加の一途をたどっている。

一方、農業構造改善等による土地基盤の整備や生産の改善も成されてはいるが、他方、農地として有望な原野が放置されているような気がしてならない。

酪農経営拡大のためにも原野はもっと生かされるべきであり、将来も国際競争に耐え得る農業の見本として、県はここに「原野開拓のモデルケース」を作り、農業者の意欲作りをすすべきではないだろうか。

酪農を志し土地を求めている農業者も数多いと思う。私の場合もその一例である。不知火海の干拓地で、乳牛と米を基幹作物として、水稲に依存した経営の改善をしようという意欲にもえた十三名の若い仲間と現在では、平均搾乳牛十頭を飼養し、粗収入七桁の農家になった。

グループでトラクターや田植機を共同利用し、コンバイン導入の段階になった。しかし、今のままでは各人の経営拡大は夢でしかない。そんな中で、地域農村の平和な暮しを確保し、他の経営をつぶさずに経営の拡大をしたい。転職か移住かだが、私達のグループでは移住にこれをもとめる。グループの半数が土地を求めて移住でき、なお発展ができたなら、残った者の経営規模は二倍に拡大され、水田二・五ヘクタール、乳牛二〇頭つけそう、これなら国際競争の仲間入りができるのではなからうか。

移住できる場所は、国外、北海道等もあるが、もっと身近に、阿蘇、矢部、九住の広大な原野が眠っている。国、県のバックアップを得て、ここを若い農業者の力で拓くことを提案する。

だが、そこは、人里から離れた、道も電気もなく積雪のある不便な土地である。原野に水が引けるだろうか。老人や子供を抱えているが、病院まで遠かる。子供の教育はどうか。牛乳の出荷は？ 土地の価格や入会権問題は？ ダニ熱等飼育上の問題ETC、未解決の問題も多いが、しかし畜産経営を夢みる者の求める五万ヘクタールにある土地がそこにある。

農林省もこの地域に、調査事務所を設けて、腰を落した調査を始められるようであるが、この土地に、ただ草を播くのでは浪費だと思われ、机上プランでなく実験農家を育ててみるべきだと思ふ。

「牛と草と人間と」この三者をここに定着させなければ、牧野が改良され、良質の草が生えてきても、蛋白質食糧の生産には結びつかないと考える。そのためには道と水が必要で、これを確保した上で一農家当り二〇〜三〇ヘクタールを経営の基礎に、将来は、酪農の場合、育成牛を含めて四〇頭、肉牛の場合には年間一〇〇頭を飼養し、二人の労力で経営して四〜六百万円(所得二〜三百万円)を目標にした高原開拓の集落を作るのである。

モデルプランを掲げると、一集落の戸数は四〜六戸で、参考図のように土地建物を配置、共有する農機具は、トラクターをはじめ牧畜に必要な農機具。農家の共同の力を各農家の個別の経営を発展させる足がかりとする。

集落に入植する農家はグループ単位とする。一戸では困難な

ことが多いので、人造りの培われたグループの入植によって、困難に対する方が発展のテンポも速いと信ずる。

土地は、国、県で買収して、一部これに手を加えて入植者に売渡す。この場合、三分の一度は入植前に牧野改良が必要で、あとは農家が蹄耕法などで改良する。土地代の支払は、三、四〇年の年賦で、建物や家畜、農機具の建造や導入には長期(総合開発資金等)の融資をする方式をとる。

牛と草と人間との定着がはじまれば、放牧と貯蔵飼料によって、年間平均した乳肉の生産が成されると思ふ。

- △ 入植の条件としては、
- 売渡土地二戸平均三〇ヘクタール(うち一〇ヘクタールは改良牧野。)
- 水道、道路、電気施設は、国、県の負担。
- △ 入植者は、乳肉牛飼育経験農家で、四戸以上のグループとする。(グループの力をフルに活用する)

△ 家族全員が移住し、現所有地は、付近の将来性ある農家に譲渡する。

△ 大きな夢を抱いた若い農業者が育つてくるこの時代に、のこされた原野を開拓して、日本の食糧基地を作りあげることが、国の基本的な農政であるとともに、農業界、熊本にかけられた使命でもあると思う。

阿蘇は熊本の農業人の手によって拓き、育て、発展させなければならないと考えるものである。

農業問題と観光に集中

— 応募レポート内容の傾向ほか —

応募されたレポート全編をいろいろな点からながめてみた。

市、郡別では、市部七十七編、郡部百二十二編と郡部が市部より多かった。職業別では、農業百二編、公務員二十四編、会社員十五編の順で三位までを占めていたが、農業が総数の半分以上だったことが注目される。また、男、女の比較では、女性の応募者が総数の二割にしかすぎなかったが、これは仕方ないことだろうか。

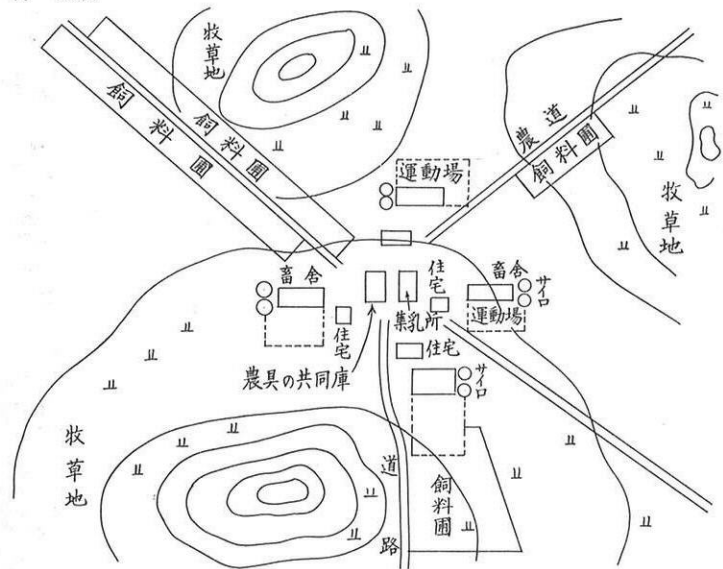
応募された意見の傾向としては、日本の食糧供給基地としての本県の農業のあり方「をはじめこれからの農業の諸方策。それに阿蘇、天草で代表される本県の観光をより一層魅力あるものとするための提言など、農業と観光について述べられたものが殆どだった。

なお、選考に当たっては、百九十九編を百五十編に、百五十編を百編にといった

最後に、募集規定にうたったレポートのテーマが漠然としていて難しいなどテーマに対する意見が、募集期間中よく聞かれたが、次回の問題点としてよく検討したい。(ユース・ブレイクの係から)

酪農四戸集落モデルプラン

○土地(一戸当)飼料圃2〜3ha、デントコーン、ソルゴー、ビート類を栽培一部放牧、採草地26〜27ha、イタリアン・ローズグラス、クローバー類を栽培建物敷地1ha(菜園・運動場を含む) ○乳牛搾乳25〜30頭、育成10〜15頭



○共有施設 集乳冷貯室・農具の共同庫 ○共有農機具 トラクター(20〜40HP) モーター・ハーベスタ、パーキュームカー、汎用ワゴン、ヘイベラー、集草反転機、プラウ・カッター、トラック